

氏 名 土井 正樹

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 214 号

学位授与の日付 平成 24 年 3 月 23 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 小集落から見た初期国家の形成過程—先スペイン期中央アン
デスのワリ国家を事例として—

論文審査委員 主 査 教授 八杉 佳穂
教授 岸上 伸啓
教授 關 雄二
教授 井口 欣也 埼玉大学
教授 坂井 正人 山形大学

論文内容の要旨

現代のペルーを中心とする中央アンデス地域は、古代アンデス文明が展開した舞台であり、古くから工芸品製作技術の洗練や、複雑な社会組織の発達が見られた。本論で取り上げるワリは、この中央アンデス地域において、紀元後 700 年頃から 1200 年頃まで、ペルー中央高地のアヤクーチョ谷を中心として栄えたと考えられている初期国家である。ワリがどのような政体であったのかについては、様々な議論が行われているが、山岳部を中心とし、中央アンデス各地へと進出した広域国家もしくは帝国であるとする研究者が多い。ワリに関するこれまでの研究は、ワリが栄えた時期のみに注目する共時的な研究が多く、また、ワリの地方拠点と考えられる遺跡におけるワリの支配者に注目した地方支配に関する研究が多い。すなわち先行研究の特徴として、①共時的な研究、②支配者に注目した研究、という点を挙げるができる。

このような先行研究に対し、本論は、ワリの形成過程を通時的にとらえる立場に立ち、さらに、支配者ではなく、支配を受ける側の人々の立場に立った研究であるといえる。ワリを含む初期国家の研究では、ピラミッド型に階層化された支配体系の存在を前提として研究が進められてきた。このピラミッド構造の上位に位置する政治的リーダーに注目する視点をトップダウン・アプローチと呼び、この支配を受ける側の視点に立った研究方法をボトムアップ・アプローチと呼ぶことにする。本論では、筆者が 2001 年以降にワリの中心地であるアヤクーチョ谷で行った踏査と発掘調査の資料に基づき、ワリ形成前(ワルパ期)、ワリ繁栄期(ワリ期)、ワリ崩壊後(チャンカ期)という 3 つの時期にわたり、初期国家の形成下において小規模な集落でどのような変化が生じているのかを論じた。

本論は全部で 9 章より構成される。第 1 章では、これまでの初期国家の形成過程に関する先行研究を振り返り、本論の特徴であるボトムアップ・アプローチの必要性を明らかにした。続く第 2 章では、ワリに関する先行研究を振り返ることにより、上述したような先行研究の問題点を明らかにし、ボトムアップ・アプローチによるワリの形成過程の解明が必要であることを確認した。

第 3 章では、筆者がアヤクーチョ谷で行った踏査に基づく資料を検討することにより、ワリの成立に伴いアヤクーチョ谷内の遺跡の立地にどのような変化が生じているのかを明らかにした。その結果、ワリ繁栄期には、異なる機能を有する遺跡が有機的に結びつくような、以前にはみられない遺跡間関係が存在するようになったことを明らかにした。このような新たな遺跡間関係の出現は、ワリ期に初期国家が成立したことを支持するものであった。

第 4 章以降は、アヤクーチョ谷のトリゴパンパ村周辺に位置する、ワンカ・ハサ、タンタ・オルホ、クルス・パタという 3 つの遺跡での発掘調査による資料に基づく議論を行った。まず第 4 章では、発掘調査によって明らかになった遺構の特徴を説明し、同時に遺構の切り合いおよび重層関係に基づき各遺跡においていくつの建築フェイズが存在するのかを明らかにした。

第 5 章では、第 4 章で明らかにした建築フェイズを、出土した土器に基づき先行研究の土器編年と関連づけることにより、各建築フェイズがどの時期に属するものかを明らかにした。その結果、ワンカ・ハサ遺跡はワルパ期とワリ期、タンタ・オルホ遺跡は、ワルパ

期とチャンカ期、クルス・パタ遺跡はワリ期に利用されていたことが明らかになった。

第6章では、土器の様式以外の属性に関する分析を行った。混和材の分析により、土器の生産体制がどのように変化しているのかを推測した。その結果、ワルパ期、ワリ期、チャンカ期と時期が新しくなるにつれて、土器製作が簡素化してゆく傾向をつかむことができた。また、器形の分析に基づき、土器を用いる活動が時期によってどのように変化しているのかを明らかにした。とくに、集落内のリーダーの地位を高めたり、維持したりする効果をもたらす饗宴の開催に注目し、ワリ成立前のワルパ期には、ワンカ・ハサ遺跡で盛大な饗宴が行われていたと考えられるが、ワリ成立後には、そのような饗宴が開催されなくなり、これは国家による祭祀の独占ととらえられることを指摘した。

第7章では、土器以外の遺物の分析を行い、小集落での経済活動と祭祀活動における国家支配の影響について検討した。農耕、土器、そして織物の生産に関わる遺跡の分析では、国家成立に伴い、これらの生産の強化が生じているという予想に反し、農耕が強化された可能性があるものの、そのほかの活動については、あまり変化が生じていなかったと考えられた。ただし、この分析結果は、小集落の経済が、ワリの国家とは無関係であったことを意味していない。遠く離れた土地に由来する海産物が、筆者が調査した小集落遺跡からも出土していることから、小集落の住民も、ワリの交易ネットワークを通じて、それらの品を入手したと考えられる。また、土偶の分析により、ワルパ期後期からワリ期にかけて、おそらく世帯を単位として行われていたような儀礼の内容が変化していることが明らかになり、このイデオロギーと関わる変化が、国家の成立により生じている可能性が浮かび上がった。

第8章では、遺構の比較と分析を行った。ワンカ・ハサ遺跡、タンタ・オルホ遺跡、そしてアヤクーチョ谷の南部に位置するニャウインプキオ遺跡の建築形態の比較により、国家形成に先立ち、アヤクーチョ盆地内の各地で萌芽的なリーダーが出現しており、そのようなリーダー間の交流によって新たな建築形態が創出された可能性が明らかになった。また、墓の構造の分析からは、ワリ期の社会階層と対応するものと考えられていた墓の構造の違いが、ある程度ワルパ期の墓においても認められることから、社会階層以外の要因によって生じている可能性を指摘した。最後に、祭祀建築と考えられるD字形建築の分析からは、小集落遺跡のD字形建築が国家の成立とともに利用されなくなり、一方で、ワリの拡大と関連する各地方の遺跡にD字形建築が存在することから、D字形建築を利用した祭祀が国家による統制を受けるようになった可能性が明らかとなった。

第9章では結論として、これまでの議論のまとめを行った。上記の分析の結果、これまで軍事的征服や経済支配というイメージで語られることの多かったワリが、その中心地の小集落に対しては、軍事や経済よりもむしろ儀礼や土器の図像と関わるイデオロギーの側面において、国家による統制を行っていた可能性が明らかとなった。このように本論を通じて、このようにこれまでのワリ国家像に見直しを迫る資料が提示できたが、より重要なことは、これまで無力で、政治的リーダーに対し従順にしたがっていたと考えられてきた小集落の住民の主体性が垣間見えたことである。たとえば、国家の交易ネットワークを通じて小集落の一般の人々が遠距離交易品を入手していたことは、小集落の住民が国家を利用していたととらえることも可能である。また、小集落における地域的な祭祀の場であったと考えられるD字形建築が国家の祭祀施設となってゆく過程は、ワリのリーダーたちが、

祭祀を通じて権力を獲得し、それを維持する上で、新たな祭祀を生み出すのではなく、すでに一般の人々によって受け入れられていたものを採用した、すなわち一般の人々の意向に配慮しながら権力形成を行っていたことを示唆している。これを一般の人々の「力」と考えることができよう。

本論文の目的は、南米アンデス文明におけるワリ（A.D.700年～A.D.1200年）と呼ばれる初期国家の形成過程を、従来採用されてきたような中核地、あるいは地方拠点ではなく、小規模の集落遺跡の発掘調査から検証することにある。

ペルーからボリビアにかけての中央アンデス地帯では、16世紀にスペイン人によって征服されるまで5000年以上にわたる文明形成の長い過程が確認されており、なかでも西暦紀元後に国家が成立したことが近年の研究で証明されつつある。ワリ国家はその一つであり、著者は、ワリ国家の中核地が存在するペルー中央高地アヤクーチョ盆地で3つの小規模遺跡を発掘し、遺構と出土遺物の解析を通してワリ国家の成立過程の解明を試みている。

本論は9章からなる。第1章では、アメリカ考古学における国家論を著者の関心に沿って批判的に整理しながら、本論文の視点を提示する。従来の国家論では、ピラミッド的支配構造を前提に、頂点に立つ中核地や地方拠点を調査対象とする傾向が強かった。しかし、近年のエージェンシー論で指摘されるように、権力の行使、支配のありかたは決して一方的ではなく、支配者と被支配者との交渉過程に注目するならば、被支配者集団の活動拠点に比定される小規模集落を調査する必要があると説く。

第2章では、ワリ国家についての先行研究をまとめる。とくに強大な帝国の存在を想定する研究者が依拠する土器の埋納儀礼、D字形建築、一定の埋葬パターンといった要素は重要としながらも、中核地や地方拠点からのデータで論じられてきた研究の限界を指摘する。

第3章では、著者自身が踏査した36遺跡の概要と発掘対象とする小集落遺跡を選ぶ基準を提示し、第4章では、選択したワンカ・ハサ、タンタ・オルホ、クルス・パタの3遺跡における発掘調査の方法と検出された遺構について詳述する。遺構の時期同定は、出土した土器の分類と編年を示した第5章で行う。その結果、クルス・パタではワリ期のみならず、ワンカ・ハサではワリ期以前のワルパ期からワリ期にかけて、タンタ・オルホはワルパ期とワリ期以降のチャンカ期に利用されたことが明らかになる。

第6章では、出土土器の属性分析を行い、ワルパ期からワリ期、そしてチャンカ期にいたる通時的変化を示す。とくにワリ期で器面調整と混和材の多様性が減じ、均質性が高まる点、祭祀をとまなう饗宴で使用される飲食用土器が減少する点が指摘される。

第7章では、国家の介入は生産関係の道具の増加と改良に連動するという先行研究を参照しながら、土製品、石器、骨角器を分析する。そこでは農具の微増をワリ国家の経済的介入とし、土器の総量の増加にもかかわらず製作関連の道具に変化がない点は、第6章で指摘した土器の均一化などと併せて、土器の製作と供給を国家が統制した可能性を示す。一方で、小集落側も、ワリ国家の傘下に入ったことを逆手にとり、長距離交易網を巧みに利用して希少価値の高い貝を入手していた可能性を提示する。

第8章では、3遺跡、および周辺遺跡における遺構と埋葬の比較を行い、従来ワリ期に新たに出現するとされてきたD字形建築や埋葬形態の中に、ワルパ期にさかのぼるものが含まれ、ワリ国家の成立には、ワルパ期の社会の分析が必要と説く。

以上の点をもとに第9章では、小集落におけるワリ国家の介入は実際に存在し、それも経済面以上に祭祀面で強かった点、一方で小集落側の自立性も若干認められた点、そして

この中核地と小集落との相互交渉では、小集落における祭祀が国家の新たな祭祀体系に編入されていく過程も認められると結んでいる。

本論文は、以下の点で高く評価される。

まず現地ペルーにおける長期間にわたる一般調査と、これに基づく適切な遺跡選定をもとに発掘調査を遂行し、複雑な石造建築群を検出したばかりでなく、出土遺物の分析を行い、本研究に必要な一次資料を入手した点を指摘しておきたい。

また国家を対象にした時代を扱いながら、中核地ではなく、小集落に目を向け、いわば被支配者の側からも国家形成論に迫るというアプローチはアンデス考古学における方法論として高い汎用性が期待でき、優れていると評価できる。

さらに現代の考古学的研究では、中心に対する周辺への関心が、空間的にも社会的にもとみに高まりつつあるが、微細にわたる編年の確立していないアンデス考古学においては、そのテーマを具体的に追究することに多大な困難がともなう。現在まで編年の大半は、装飾の施されたいわゆる精製土器の形式分類に依拠しており、そうした編年の基準となる土器の出土頻度は中核地から離れるにつれ減る。その結果、中核地において解明している通時的変化と周辺の小規模な社会の動きを連動させることが難しくなり、両者の関係性を追究することは難しくなる。著者は、それを受け入れた上で、従来研究者が等閑視してきた無文土器に注目し、また器面調整や焼成など細部にわたる属性を分析することで、この困難な問題に挑戦している。国家論に関する研究方法の新規開拓ともいえる。

また、国家が成立したワリ期ばかりでなく、その前後の時期にも注目し、ダイナミックな時間的変化を追究している点も高く評価できる。従来ワリ国家は、その前身となる社会について考察されることがほとんどなく、中核地や地方拠点で確認される特徴的な遺構や遺物が中核地において短期間に出現し広まったと解釈されてきた。その意味で、ワルパと呼ばれる国家形成直前の社会に光を当て、国家形成論へとつなげる作業を試みた本論文の独創性の高さについては異論を挟む余地はない。

ただし、本論文にまったく問題がないわけではない。膨大な発掘データの記述や遺物分析に追われるあまり、そこから導き出される解釈を自身の枠組みに位置づける作業に若干甘さがみられる。また本論文で示された問題意識が、先行研究で触れられてきた課題と十分に関連づけられているとはいえない部分もわずかながら見受けられる。

こうした点は今後の課題として残るものの、国家の中核地ではなく、その周辺に位置する小集落のデータをもとに支配・被支配の交渉過程を明らかにし、さらに時間軸を加味して国家形成過程の解明を試みた本論文は、アンデス考古学に新風をもたらし、初期国家研究をさらに深める可能性を秘めていることはまちがいない。

以上の点から、審査委員会は全員一致で本論文が博士学位論文に値すると判断した。